塾報
しゅうめい
第２６号
平成 26 年５月 20 日
発行 塾長 上谷恭範
〒111－0052
台東区柳橋１－２６－３
TEL 03(3862)9218

「なぜ私達は良書・難解な本を読むのか。」

塾長 上谷 恭範

日本の本屋には、日本の本だけでなく世界各国の本がたくさんならんでいる。幼児の絵本から随筆集、小説、偉人伝、評論文、そして専門書等々無数の書籍があるということは、日本人は昔から識字力が高く、高い教育を受けた老いも若きも良書を熱心に読む国民である証であるといえる。修明塾にも、読み聞かせ本から幼児向けの本、小学低学年から高学年の本、中学生、高校生並びに大学生向けの難解な専門書、教師、大人の読む本、古典、漢文まであらゆる層の各分野の良書が揃っている。塾生並びに塾生のご父母、保護者のみなさんが当塾の図書をお読みになり、考えることによって自らを教育し高めるために大いに活用していただければ幸いである。

読書本は、年齢、学年によって異なる。幼児期には、絵本、小学低学年は児童書、高学年になると小説や物語本、中学生になるとやや難解な小説、専門書、人生に関する抽象的な文章に変わっていく。つまり大まかに述べると幼児期には夢のある情緒豊かな空想的な文章、小学生は具体的、現実的な文章、そして中学生高校生になると抽象性専門的な文章と質が変化していく。

ロビンソークルーソーのように無人島にたった一人流されるようになったとき、持っていきたい10冊の本を選べと言われたらどうする?-テレビ、ラジオ、スマートフォン、携帯電話等々から離れた社会で、自分はどう生きるかを考えさせられる難問である。本来、人は孤独であり多かれ少なかれ孤島に流された人間である。ＭＪアドラー ＣＶドーレン(外山滋比古、槇末知子訳)「本を読む本」の中で次の一節がある。

「ところで、人間の精神には一つの不思議なはたらきがある。それはどこまでも成長しつづけることである。このことは、肉体と精神のきわだった違いである。肉体はさまざまの限界があるが、精神に限界はない。人間の肉体は、ふつう三十歳位をピークに次第に下降線をたどるものだが、精神は、ある年齢を境に成長が止まるということはない。老衰で脳が衰えたときはじめて、精神の活動も低下する。(中略)

だが、人間にだけ与えられたこのすぐれた精神も、筋肉と同じで、使わないと萎縮してしまうおそれがある。精神の鍛練を怠ると、“精神萎縮”という代償が待っている。それは精神の死滅を意味する恐ろしい病である。多忙な生活を送っていた人が、引退すると衰えが来ることが多いのもこのためである。仕事一筋に生きてきたが、それは外側から人為的に支えられていたのである。その支えがなくなると、自分の中に精神的な貯えのない人は志向をすることをまったくやめ、やがて死がはじまる。われわれのまわりにあるテレビ、ラジオをはじめ、さまざまの娯楽や情報源も、すべて人為的な突っかい棒にすぎない。このような外からの刺激に反応していると、自分の精神も活動しているような錯覚におちいる。だが、外部からの刺激は麻薬と同じで、やがて効力を失い、人間の精神を麻痺させてしまうのだ。自分の中に精神的な貯えをもたなければ、知的にも道徳的にも、精神的にも、われわれの成長は止まってしまう。そのとき、われわれの死がはじまるのである。積極的な読書は、それ自体価値のあるものであり、それが仕事のうえの成功につながることもあるだろう。しかしそれだけのものではない。すぐれた読書とは、われわれを励まし、どこまでも成長させてくれるものなのである。」

吉田兼好は徒然草の第十三段でこう書いています。

「ひとり、燈のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしえのは、あはれなること多かり。」

読んで楽しい本は暇つぶしにはいいが娯楽書に過ぎない。情報を伝えるだけの本は、情情報通にしてくれるだけである。心を本当に豊かにし自分を向上させてはくれない。楽に読める本ばかり読んでいては、精神の成長はない。自分の力以上の難解な本に取り組んでこそ読む人の心を広く、豊かにしてくれるものである。

最後に、「良書を読むための条件は悪書を読まぬことである。人生は短く、時と力は限られているから」(ショーペンハウエル)を付加しておく。

(参考本)

1MJ-アドラー・CJ ドーレン著 外山滋比古・槇未知子訳「本を読む本」(講談社学術出版)
2齋藤孝著「声に出して読みたい日本語」(草思社出版)
3三輪田学園「読書のすすめ」(三輪田学園出版)

以下の文は、みなさんが親しく読まれたしかも冒頭書き出しの文である。

(1)詩 (2)古事記 (3)創世記 (4)～(6)日本むかしばなし
(7)～(8)イソップ物語 (9)マザーグースの文
(10)～(18)古典の名文 (19)～(21)現代文。

大きな声を出して暗誦して下さい。言葉の意味にとらわれず日本語としての調子のよさや語感を楽しんで下さい。

(1)～(21)の文章の作者と本の名を書いて、各教室の塾の先生に提出して下さい。全問正解者には、図書カードを贈呈します。参考書で調べても、家族に聞いても結構です。締め切りは、6月7日(土)までです。

(1) わたしが両手を広げても
お空はちっとも飛べないが
飛べる小鳥はわたしのように
地べたを早くは走れない

わたしが体をゆすっても
きれいな音は出ないけれど
あの鳴る鈴はわたしのように
たくさんな歌は知らないよ

鈴と小鳥と それからわたし
みんな違って みんないい

(2) 大むかし、高天原という国に、天照大神という、太陽のように、明るい女の神さまがおりました。ところが、その弟の須佐之男命は、とても乱暴で、いつも、いたずらばかりしています。

ねえさんの天照大神は、はじめのうち、弟をかばっていましたが、あまりいたずらがひどすぎるので、天の岩屋という、石のあなにはいり、入り口に岩の戸をたてて、かくれてしまいました。

太陽のように明るい、天照大神がくれてしまったので、国じゅうは、きゅうに、まっくらになってしまいました。

（3） 初めに、神は天地を創造された。
地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神 の霊が水の面を動いていた。
神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。
神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ば れた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。
1 アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図。2 アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、
3 ユダはタマルによってペレツとゼラを、ペレツはヘツロンを、ヘツロンはアラムを、 4 アラムはアミナダブを、アミナダブはナフションを、ナフションはサルモンを、 5 サルモンはラハブによってボアズを、ボアズはルツによってオベドを、オベドはエッサイを、 6 エッサイはダビデ王をもうけた。

（4） むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。おじいさんは、毎日山へしばかりに、おばあさんは、川へせんたくをしてきます。
ある日、おばあさんが、いつものように、川でせんたくをしていると、大きなももが、ドンブラコ、ドンブラコと流れてきました。

（5） むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがおりました。子どもがいないので、白という犬を、子どものように、かわいがっていました。
ある日のことです。おじいさんが、うらの畑をたがやしていると、白が前足で畑のすみを掘りながら、ほえました。
「ここ掘れワンワン、ここ掘れワンワン。」と、ほえました。

（6） むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。ふたりは、子どもがほしくて、ほしくて、毎日神さまにお願いしました。
「どうぞ神さま、小指くらいの小さい子どもでもけっこうです。」
すると、どうでしょう。ほんとうに、小指より小さな赤んぼうが生まれたのです。
おじいさんとおばあさんは、その子を一寸法師とよんで、だいじに育てました。

（7） 暖かい、南のほうの国のことです。
高い山のふもとに、小さなむらがありました。羊は、昼間は野原に村に、たくさんの羊をかっている家がありました。
つれていって、はなしておきます。
「わたしは、遠くの町へ行ってくるから、そのあいだ、おまえが羊の番をするんだぞ。羊たちが、おおかみに食べられないように、気をつけてな！」と、おとうさんが、むすこにいました。

（8） 天じょう裏にすんでいたねずみの一家は、とうさんねずみがいなくなって悲しんでいました。残ったねずみは、これから、どうしたらよいかそうだんしました。
とうさんねずみは、ねこにつかまってしまったのです。
「これから、どうしたらいいかねえ。」
かあさんねずみがいいました。いせいのいい、にいさんねずみは、
「ねこは、おとうさんのかたきです。みんなで力を合わせて、ねこをやっつけようじゃありませんか。われわれが五ひきでかれば、ねこ一ぴきぐらい倒せないことはありません。ねこさえいなければ食べ物は、らくにとることができるのです。」といいました。かあさんねずみは、
「おまえが先頭に立って行くのなら、やってもいいけど……。」といいますと、にいさんねずみは、がたがたふるえだしました。

（9） 月よう日の こどもは きりょうが いい
火よう日の こどもは おじぎが じょうず
水よう日の こどもは かなしみが ある
木よう日の こどもは とおくへ 行っちゃう
金よう日の こどもは むじゃきで やさしい
土よう日の こどもは はたらくので たいへん
そして、日よう日に 生まれた こどもは
すてきで りこうで まっすぐで じょうぶ

だれでも、おたんじょう日は、うれしいものです。

（10） 今は昔、竹取の翁(おきな)といふ者有りけり。野山にまじりて、竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば讃岐造(さぬきのみやつこ)となむ言ひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。
をかし。雨など降るもをかし。

（11） いづれの御時(おほんとき)にか、女御(にようご)・更衣あまた候(さぶら)ひたまひける中に、いとやむごとなき際(きは)にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。
初めよりわれはと思ひ上がりたまへる御方々、めざましきものにおとしめそねみたまふ。同じほど、それより下臈(げらふ)の更衣たちは、まして安からず。

（12） 春はあけぼの。やうやう白くなり行く、山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。
夏は夜。月のころはさらなり。やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。
秋は夕暮。夕日のさして山の端(は)いと近うなりたるに、烏(からす)の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まして雁(かり)などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。
冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火などいそぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもて行けば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし

（13） 男もすなる日記(にき)といふものを、女もしてみむとて、するなり。
それの年の十二月(しはす)の二十日あまり一日(ひとひ)の日の戌(いぬ)の時に門出す。そのよし、いささかにものに書きつく。

（14） 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹(しやらさうじゆ)の花の色、盛者必衰(じやうしやひつすい)の理(ことわり)をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵(ちり)に同じ。

（15） ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世の中にある人と、栖(すみか)とまたかくのごとし。

（16） 善人なほもって往生をとぐ、いはんや悪人をや

（17）つれづれなるままに、日暮らし、硯（すずり）に向ひて、心に移り行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、怪しうこそ物狂（ものぐる）ほしけれ。

（18）月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ馬の口とらえて老をむかふ者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

（19）どうどど　どどうど　どどうど　どどう
青いくるみも吹きとばせ
すっぱいかりんも吹きとばせ
どうどど　どどうど　どどうど　どどう

（20）コペル君は中学二年生です。
ほんとうの名は本田潤一（ホンダ・ジュンイチ）、コペル君というのはあだ名です。年は十四ですが、十四にしては小さいほうで、じつはコペル君も、かなりそれを気にしています

（21）アボンリー街道をだらだらと下って行くと小さなくぼ地に出る。レイチェル・リンド夫人は、ここに住んでいた。
まわりには、ハンノキがしげり、ずっとおくの方のクスパート家の森から流れてくる小川が横切っていた。森のおくの方の上流の方には思いがけないふちや、たきなどがあって、かなりの急流だそうだが、リンド家のくぼ地に出る頃には、流れのしずかな小川となっていた。
それというのも、レイチェル・リンド夫人の家の前を通るときには、川の流れでさえ、行儀作法に気を付けないわけにはいかないからである。
レイチェル夫人は、まじぎわにすわり、無心の小川から子どもにいたるまで、通るものすべてに、するどい見はりの目を光らせていて、すこしでもわからないことや、ふつごうなところを見つけたが最後、その理由を、根ほり葉ほりさぐり出さずにはおかないということを、川の流れのほうでもわきまえていたのかもしれない。
自分のことはそっちのけにして他人のせわばかりやいているものは、アボンリーだけでなく、どこにもたくさんいるが、レイチェル夫人は、自分のことはすっかりやったうえに、他人のせわまでやくだけの腕まえをもっていた。
家事のきりもりはじょうずだし、裁縫奉仕のあつまりの中心になっているし、そのうえ、日曜学校の仕事から婦人外国伝道後援会のたいせつな役まですっるといったぐあいでありながら、なお、何時間でも台所のまど下にすわって、もめんのさしこのふとんを編むだけの余裕やあった。

新企画！ ☆小学生対象☆
理科実験教室が始まります

理科実験の大切さ

片桐　芳郎

私たち「人」は、「自然」の中に生きています。人は、自然の中で、これまで多くの不思議な現象や理解できないことなどに遭遇してきました。それを解決しようとして「自然科学」という学問が進歩・発展してきたのです。
理科は、そうした自然の現象を対象とする教科であり、どうしてこんな現象が起こるのだろうかという素朴な疑問から事実を基に様々な観察・実験を重ねていくと一定の「規則」が見い出されていきます。それを見つけだすことが理科の学習に他なりません。
従って、理科の学習は、教科書で知識を得るだけでなく、というよりむしろ、「実験」こそが理科学習の中心となると言っても過言ではありません。
「理科実験」には、多くの自然の中の事象から、何故こうなるのかという問題をまず発見し、自分で仮説を立て、観察・実験に取り組み、自ら一定の「規則」をそこから見つけ出す、という過程で『自分で問題を解決できた』という「達成感」を味わうことによって、さらなる問題解決能力を得ることができる、という重要な意義があるのです。
「理科実験」はまた、それにより、科学的なものの見方・考え方（思考力）が身についてくることにもなり、もっと言えば、この自然の中で「生きる力」を醸成することにもなるのです。
2002年のノーベル化学賞受賞者の田中耕一さんも、小学校４年の時の、先生と一緒に行った自分のアイデアによる実験の成功が、科学者の道に進ませるキッカケになったと言います。
また、実験を重ね多くの経験を積んだ人に「求めずして思わぬ発見をする能力」（セレンディピティ）が訪れている、とも言われています。
当修明塾では、この度、受験の為の理科の勉強の一環としてというに止まらず、それ以上にこのような実験の意義・重要性から、「理科実験教室」を開催することといたしました。当塾でのリアルな実験を通じて、必ずや驚き・喜び・感動の中で自然に対する探究心がより高まり、理解が深まることとなりましょう。
是非、大勢の児童・生徒の皆さんのお越しをお待ちしています。

体験・実験・制作

佐藤　昌央

ロボット教室を開講して５月でちょうど１年たちました。授業と言っても、先生が説明しながらみんな足並みそろえてロボットをつくりません。生徒ひとりひとりがテキストを読み、写真を見ながら自分のペースでつくります。生徒が自分の力で発想で、自分の手でロボットを作る。やり遂げる力だけではなく、考えて・つまずいて・工夫をして・表現する力も身に付けることができます。先生は生徒の伸びる力を邪魔しないように、引き出すアドバイスをします。
そして、いくつものロボットを作るといろいろな仕組みが身に付きます。その経験を活かしオリジナルロボットを作ってくれることを期待しています。
これからはじまる理科実験教室。
「百“勉強”は一“体験”にしかず」
『百聞は一見にしかず、百見は一行にしかず』
教科書などでの勉強はもちろん必要ですが、実際に実験・体験をしたほうが何よりも頭に入り心に残ると思っています。
近年、学校教育では理科実験が減っています。
このままでは子供たちの探究心が衰えてしまう！！
だからはじめます理科実験教室を。
実験・観察を通じて驚きや喜び感動を与え、楽しみながら関心力を高めます。
ロボット教室、理科実験教室ともに先生であると同時に、みんなの兄貴分として楽しく学べるようにがんばります。

1学期　定期試験対策勉強会
（中学生・高校生　対象）
１回２時間の指導～誰でも参加できます。
☆学校課題の質問対応
☆苦手科目を徹底指導　申込受付中！

創立４８周年
修明学園
浅草橋教室　03-3862-9218
高砂教室　03-3650-7214
番町教室　03-3222-9170
修明塾ＨＰはこちら　http://www.syumei.co.jp
（※塾報バックナンバーもご覧になれます）
修明塾ブログ（受験・教育に役立つ情報更新中）